
RED DRAGON

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RED DRAGON

【著者名】

Z7307A

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

平和を願つただけなのに、悲劇は起こつた。呪いを持つ少年「ルシア」とドラゴンの「ドラゴン」の物語。何故、彼らは罪を背負わなければいけないのか?争いは悲劇を生んだ -

プロローグ（前書き）

以前、短編として出していったものですが、アドバイスにより、見易いように連載へと手直しさせて頂きました。
内容の大きな変更はありません。
少しでも心に残ればと切に願っています。

プロローグ

白き龍は、罪を犯した。

その身は罪の色に染まり、洗っても落ちない。

洗つてもー。

洗つてもー。

罪は消えない。

いつまでも。

紅い龍のまま。

第1話 ルシアとドラン

「いい眺めだなあ

15、6の少年は紅いドラゴンにまたがり、下界を見下ろしていた。
「やうか？私には、どの景色も同じようにしか見えん」と、紅いドラゴンは下界を見た。

「人間のやることなど、何処へ行つてもたいして変わらんよ」

「町並みもそうだけじ、風に吹かれる木々のざわめきや海くと続く川が陽に当たつて反射する光がきれいじゃない」

少年は、にこにこしながら言つた。

「そんなの見て何がおもしろい

と、紅いドラゴンは鼻で笑つた。

「わう、ドランは風情つてものがわからないんだから

と少年は、膨れた。ドランはそんな少年の言葉を無視して、森の中に降りた。

「よつと」

少年はドランの背中から飛び降りた。

「じゃあ、町へ行つて来るよ

と少年は、振り向いた。

「こざとこつ時は、その笛を鳴らすのだよ。お前はいつも自分の力でなんとかしようとするが、その命は今やお前の命だけのものではない。私は、いつもギコギコの場面でヒヤヒヤしながらお前を助けるのは一苦労だ」

ドランは、低い落ち着きのある声で言つた。

「うん

と少年は頷き、首からさげてこる小さな笛をにぎりしめた。少年は町へと駆けて行き、ドランはその姿を見送つた。

「おじさん、何か困つたことないかい？」

酒樽を店の中に入れる男に少年は尋ねた。

「何だ坊主。俺は忙しいんだ。よそへ行きな

と、男は突然目の前に現れた少年を冷たくあしらつた。

「おやじ、持つて来たぞ」

男は、店主の近くに酒樽を置いた。

「(一)苦労さん。これ、代金ね」

と、店主は男に酒樽の代金を支払つた。

「毎度」

「あれ?」この子、あんたの子かい?」

と店主は、男の後ろに立つてゐる少年に気がついた。

男は店主の言

葉に振り向き、

「お前、まだいたのか!?」

と、立たずむ少年を迷惑そうに見た。

第2話 怪物

「うちは、酒を飲むところだ。君にこの店はまだ早いよ」と、店主は少年を追い払おうとした。

「ねえ、困っていることない?」

少年は気にせず、ここにしながら尋ねた。

「お前、いい加減にしねえと、ただじゃ帰さねえぞつ……」

血の氣の荒い男は、今にもつかみ掛かるような勢いで怒鳴った。

「困ったことねえ……。変な噂がたって、最近客が減つたことだね。まあ、君にそんな愚痴を言つても仕方ないんだけどねえ」

と店主は、溜め息混じりに言つた。

「変な噂?」

少年は、店主の話に耳を傾けた。

「お前に話す必要なんかねえよ……あ、ヒツとと帰れ……！」

と、男は少年の腕を掴んだ。

「イヤだ！話を聞かせてくれたら帰るよ……！」

少年は男の手を振り払うために身をよじらせ、抵抗した。

「本当に帰るんだな？」

と男は、このしつこい少年に顔を近づけた。

「うん！」

と少年は、頷いた。

「しゃーねえなあ……」

男は少年を追い払うこと一寸諦め、頭をボリボリと搔いて近くの椅子を引き寄せ座った。

「今、この町で夜になると怪物が現れるつて噂がたつてんだ。実際に見た奴の話では、そいつはデカイ翼を持っていて、手当たり次第の人間を喰えるだけ喰つちまう」

「まったく、何だつてこの町を襲うんだろうねえ。こっちは、商売上がつたりだよ。それどころか、自分の命まで危ないなんて」

再び店主は溜め息をついた。

「ありがとう。じゃあね！」

と少年は話を聞き終えると、あつせつと店を去った。

「ほう、人を喰う怪物か」

ドランは、少年から町の噂を聞いた。

「もしかしてって思うけど……」

と、少年はドランを見た。

「私と同じドラゴンかもしれぬな」

とドランは、少年の思っていたことを口にした。

「今夜、町へ泊まってみるよ」

「そうか、わかった」

と、ドランは頷いた。

第3話 ナイト登場

少年は安い宿を探していた。

「泊まるつて言つても、お金ないんだよねえ~」

と、少年は手に握っているわずかな銅貨を見て、苦笑いした。

「はあ~」

一人の少女が溜め息をつきながら歩いていた。そこへ向かい合わせに歩いて来た男とぶつかってしまった。

「痛つてえなあ」

と、ガラの悪い男は少女を睨みつけた。少女はとっさに、「す、すみません!!」

と、頭を下げて謝った。

「この俺様にぶつかつといて、ただ謝るだけで許されるとでも思つてんのか?!」

と男は、少女を突き飛ばした。

「キヤツ!!」

少女は尻餅をつかされ、

「ちょつ、何すん…」

と、さすがにこの男に何か言い返してやるうかと思つた。だが、その男の顔をよく見ると、町一番の荒くれ者で有名な男であった。

「何だ? そつちがぶつかつて來たくせに、俺に文句でもあんのか?」人相の悪い顔が歪み、さらに見る者に恐怖と威圧感を与えた。

「い、いえ」

と、少女は慌てて首を大きく左右に振つた。

「事によつちやあ、許してやらんでもないぞ。俺の相手をするんだつたらな」

と男はニヤリと笑い、少女の腕を掴み、連れ掠おうとした。そんな光景を見ていた少年は、少女を助けようと近づいた。

「おー、セーの…」

少年が男に声をかけようとした時、田の前にすりつと牆の高い男が現れた。

「おい、その娘を連れてどうするつもりだ！」

「あん？ 何だお前」

「ナイト様！」

と、少女はその突如現れた男の名を呼んだ。

「お前、俺に盾突こうつてのか？ だつたら、ヒンドひねりつぶして、見世物にしてやるよ」

と男は笑って、ナイトに殴りかかった。

ナイトは男の拳をひらりとかわし、男の腹をおもいつきり殴った。

そして、腹をおさえ、前屈みになつた男の首根っこに、その長い脚でかかと落としをくらわし、とどめをさした。

男はその場に倒れ、気絶してしまつた。

第4話 ルシアとティーナ

「わあ、すごいなあ」

と、少年はナイトの姿を尊敬の眼差しで見ていた。

「大丈夫かい？ ティーナ」

ナイトは、少女に声をかけた。

「はい、ありがとうございます」

ティーナは礼を言つていたが、その表情は何故か明るいものではなかつた。

「ティーナ、気をつけなさい。こんな奴とは一度と関わっちゃいけないよ」

と、ナイトは優しく言つた。

「はい」

「僕はこれから用事があつて、君を家まで送つていってあげる」とができないけど、平氣かい？」

ナイトは心配そうに、少女を見つめていた。

少女は、あまりナイトと目を合わせず、伏し目がちだつた。

「平氣です。ご迷惑おかけしました」

とティーナが言つた後、ナイトはその場から去つた。

「助けてもらつたのに、あんまり嬉しそうじやないね」と少年は、ティーナに声をかけた。

「あなたは誰？」

見知らぬ少年にティーナは尋ねた。

見た目は普通の少年。旅の格好をしていて、歳は、少し下のよう感じた。

「俺の名前は、一応、ルシア」

「一応って？」

ティーナは、少年の名乗り方が気になつた。

「気にしなくていいよ」

しかし、少年はにっこりと笑い、理由を聞かしてくれなかつた。

「ねえ、何で君は嬉しそうじゃないの？」

「助けてもらつて嬉しいわよ。嬉しいことは嬉しいんだけど…」

と、ティーナは困つた顔した。

「聞かせてよ。君の力になつてあげられるかもしれないよ」

ティーナは、無邪気な笑顔を自分に向ける少年を見て、話してもいいだろうと思った。この少年に何か出来るとは期待していないが、町の者ではない彼なら、話してもいいと思ったのだ。

「あなたに言つても仕方ない事よ。私はね、町長の娘なの。最近、夜に現れる怪物に頭を悩ませていた父は、怪物を倒せる人を捜していたの。そして、ナイト様の名があがつたのよ。ナイト様は、怪物退治をする専門の人なの。でも、報酬額が高くて…」

第5話 報酬金の代わり

「お願いです…どうか、この町を守って下さい…！」

と、ティーナの父は必死にナイトに頼み込んでいた。

「ですが、僕の指定した怪物退治の報酬額が支払えないんでしょう？」

だったら、無理ですね」

とナイトは、冷たく突き放した。

「これで精一杯なんです」

ティーナの父は大きな麻袋を差し出したが、

「困りますよ。こつちは命を懸けているんです。安請け合いはできませんよ」

と、ナイトは首を縦に振らなかつた。

「あのう」

父とナイトのやりとりをドアの隙間から覗いていたティーナは、いつもたつてもいられず、一人の間に入った。

「私からもお願いします。このままでは、町の人々は安心して夜を迎えることができません」

ティーナも父と一緒になつて、ナイトに訴えた。ナイトはそんなティーナを見ながら、

「町長、この娘はあなたの娘さんですか？」

と、尋ねた。

「ええ、娘のティーナです」

「可愛い娘ですね」

と、ナイトはニヤリと笑つた。ティーナは町の中の美人に数えられる一人だつた。

「では、指定した金額が払えないのでしたら、あなたの娘さん、ティーナを僕にください」とナイトは、微笑した。

「な、なんですって！ティーナを！？」

と町長は、紳士的な態度のナイトからまさか、そんな言葉が飛び出してくるとは思わなかつた。

「町を守りたいんでしょ？」

ナイトはこの憎らしいセリフを善人の仮面を被つた悪魔のように、にっこりと笑つて言つた。

「ティーナ…」

と父はティーナの手を握り、

「この町のために…」

と、苦しそうに言つた。

「イヤな奴。人の足元を見るなんて」

さつきまでのルシアの中でのナイトのイメージは、がらりと真逆に変わつた。

「そういえばあなたは、こんなところで何をしているの？旅をしているみたいだけど…」

「今、宿を探しているんだ。でも、お金がなくて、安い宿がないかと思つて」

「いくら持つているの？よかつたら教えて」

第6話 テイーナ宅

ルシアは、今の所持金を掌に出して見せた。

それを見たティーナは、

「え？！これじゃあ、どんなボロの宿屋でも泊まれないわよ」と、驚いて言った。

「え…じゃ、じゃあ、馬小屋でもいいや…」

ルシアはティーナの言葉に、肩を落とした。そんなルシアを見て、ティーナは哀れに思つた。

「よかつたら、家に泊まる？一晩なら平気なはずよ」とティーナが言つた瞬間、パアッと、ルシアの顔が明るくなつた。

「ホント！？」

「ええ」

と、ティーナは笑つて頷いた。

ルシアは、ティーナの家の夕食をガツガツと食べていた。その光景を畳然として、ティーナとティーナの父、メイドは見ていた。

「おかわり！！」

と、ルシアは皿をメイドに差し出した。

メイドは呆気にとられていて、ルシアの皿をすぐに受け取る事が出来なかつた。

「…ダメ…かなあ…？」

ルシアは、ティーナと父の顔色をうかがつた。父は笑い出し、

「君、おかわりを」

と、メイドに言つた。

「はい」

メイドはすぐに皿を受け取り、慌てて調理場へと向かつた。

「もう、おかわり11杯目よ。まだ入るの？」

と、ティーナは皿を丸くしながら、ルシアのきやしゃな体を見て言

つた。

「うん」

トルシアは、笑顔で答えた。

夕食が終わると、ルシアのために用意された部屋にルシアは入った。ルシアは窓を開けた。少し冷たい夜風が、ルシアの頬を撫で、焦げ茶色の髪を揺らした。

『お前の名前は、ルシアだ』

ルシアの記憶の中の男は、優しくルシアの頭を撫でた。

『ルシア……ル……シア……』

男は血まみれになりながら、苦しそうにルシアの名前を呼んでいた。その男の目の前には、返り血を浴びた10歳のルシアが立っていた。その手には血のついた短刀を握り締め。

『ルシア……』

「ルシア」

ルシアは呼ばれ、

「はっ」

とし、後ろを振り向いた。開いたドアに、ティーナが立っていた。

「ティーナ、どうしたの?」

「ルシアと話しがしたいと思って。駄目かな?」

「いいよ」

とルシアが返事をすると、

「よかつた」

と、ティーナはにこりと笑ってベットに腰掛けた。

「ルシアって歳いくつ?」

「多分…15くらいかな?はつきりはわからないんだ」

「ええ!? 15? もつと下かと思った」

ティーナは、ルシアの無邪気な笑顔と素直な言動から、もつと歳下だと思つていた。

「そう言われば15に見えなくないわね」

「ティーナ、何か酷くない?」

と、ルシアは仏頂面になった。

「ごめん」

とティーナは笑つて謝つた。

「私は17よ。ルシアより2つ上ね」

「ルシアは、旅をしているんでしょ? 何でこの町に来たの?」

ティーナは、次の質問をした。

「別に何処へ行くつていう当てはないんだ。たまたま通りかかった町に来て、困つた人達を助けるんだよ」

「何でそんな事をするの?」

ルシアはティーナに背を向け、開けていた窓から夜空を見上げた。

昼の明るさを失つた空には、闇に捕えられた光達が、必死に輝き続けていた。

「罪の償い」

とルシアは一言、呴くように言つた。

「罪の…償い？」

「人を…殺したんだ。たくさんの人を。そして、名前がない俺に名前をつけて育ててくれた人を、一番大切な人を殺したんだ。この手で…。俺には、名前を持つ資格なんてなかつたんだ」

と、ルシアは淋しく微笑した。

そこには、瞬間の無邪気な笑顔を見せるルシアはいなかつた。代わりに、悲しい影を背負つた大人びた少年が立たずんでいた。ティーナはこの時、ルシアのあの言葉の意味がわかつた。「だから、名前を名乗る時に一応つて言つたのね。ごめんなさい、私、悪いこと聞いたやつたのね」

とティーナは、俯いた。

「ねえ、ティーナ」

と、ルシアは明るい声で声をかけた。ティーナは、顔を上げた。

「俺がティーナを助けてあげる」

「え？」

ルシアの突然の言葉にティーナは、きょとんとしていた。

「俺が怪物を倒せば、ナイトの処に行かなくてすむだろ？」

「そうだけど…」

ティーナは、ルシアがまさか怪物を倒せるとは思わなかつた。彼女よりも少し背の低く、小柄な少年に何が出来るのだろう？

「困つている人達を助けるのが、俺の罪の償い方なんだ。ただのエゴつて言わればそれまでだけどね」

ルシアはまだ影を背負つていた。彼は、一体どんな思いをして生きてきたのだろう？

ティーナは、自分よりも強い少年を見つめた。

「大丈夫、俺に任せて」

と、ルシアはにっこりと笑つた。

ティーナは、難題をこんなにも簡単であるかのように言つてしまつてルシアを見て、信じようと思つた。

信じてあげたかつたかつたのだ。自分も彼の救いになればと。

「お願ひ、怪我しないでね」

と、ティーナは微笑んだ。

「キャーッ！！」

突如、外から悲鳴が上がつた。

「きつと、怪物だわ！！」

と、ティーナの顔が青ざめた。

「出たな怪物！！」

とルシアは叫ぶと、窓に足をかけ、2階から飛び降りた。

「ルシア！」

ティーナは驚いて窓に駆け寄り、下を見下ろした。すでにルシアの姿は、闇に消えていた。

ルシアが悲鳴の聞こえた方へと駆けて行くと、先にやつて来ていたナイトの姿があつた。

ルシアは腰に付けていた小さな袋から小瓶を出し、

「ナイトさん、ナイトさん」と呼んだ。

「何だ？」

とナイトが振り向くと、ルシアは小瓶の蓋を取り、中に入っている粉のにおいを嗅がせた。甘つたるい薫が、ナイトを包み込んだ。

「な、何だこれ…は…」

まぶたは重くなり、体の全身の力は抜け、その場に崩れ落ちた。ナイトはすっかり眠りこけてしまった。

「さあ、邪魔者は消えたと」

とルシアは満足そうに、小瓶をしまった。

「アーハツハツハ…！…ああ、もつと喰らうがいい」

悲鳴が聞こえた方には、黒いドラゴンが暴れていた。その背に男が立つて、笑っていた。

「やめろつー！」

とルシアは、黒いドラゴンの前に立ちはだかつた。

第9話 呪われた色

「邪魔をする気か？ ビリやから喰われたいようだな。ならば望みビリににしてやる！」

黒いドラゴンはルシアに向かつて大きな口を開け、襲いかかつて来た。それをルシアは、ひらりとかわした。

「身軽な奴だ。だが、次はそうはいかんぞ」

再び黒いドラゴンはルシアに襲いかかつてきた。

「ルシア！！」

そこへ、ルシアが心配になつて駆けつけたティーナが現れた。

「ティーナ？！」

ルシアが驚いてティーナを見た瞬間、黒いドラゴンは標的を変え、ティーナに襲いかかつた。

「キヤーッ！！」

「ティーナ！！」

ルシアはすぐさまティーナを庇つて、目の前に出た。そして、首から提げている笛を吹いた。

「ん！？」

男が空を見上げると、紅いドラゴンが向かつて来るのが見えた。ドラゴンは男と黒いドラゴンに向かつて、炎を吹き出した。黒いドラゴンは、さつと炎をかわした。

「ルシア、大丈夫か？」

と、ドラゴンはルシアのもとへと降りた。

「うん、平氣」

と、ルシアは頷いた。

「ルシア…あなたつて一体…」

ティーナはドラゴンを見上げ、驚いていた。

「ほう、伝説の罪深き紅いドラゴンか」

男は笑いながら、ドラゴンを眺めた。

「人を喰らい、契約を破ったその罪で、白いドラゴンから人間の血の色に染まつた…」

「おい…！」

ルシアは呼ばれ、後ろを振り向いた。そこには、眠らせたはずのナイトが立っていた。

「よくも邪魔を！」

「来ちゃダメだ！！」

ルシアはとっさに叫んだが、田の前でナイトはぱくつと黒いドラゴンの口の中に入ってしまった。

「愚かな人間だ」

と、男は哀れんでいたが、口元にはうつすらと笑みを零していた。

「よくもっ！」

とルシアは、男を睨みつけた。その瞳は、紅く染まっていた。

それを見た男の顔は、険しくなった。

「お前はもしかして、呪われし子供」

ルシアは腰につけていた短刀を取り出すと、黒いドラゴン田掛けて飛びかかった。

第10話 また何時か

黒いドラゴンの頭部に、ルシアの短刀が突き刺さり、黒いドラゴンは悲鳴を上げた。

短刀をすぐさま抜いたルシアは、黒いドラゴンの返り血で紅く染まっていた。そこには、昼間のルシアとも、あの影を背負つた少年とも違っていた。

ルシアは不気味に笑うと、ペロリと舌なめずりをした。その様子を見た男は愉快そうに、

「やはり、お前は呪われし子供！ まだ生き残りがいたのか」と、言った。

「これはおもしろい組合せだ」

黒いドラゴンは血を流しながら、ルシアに向かつて唸り、襲いかかって来た。すると、ドラゴンは黒いドラゴンに炎を吹いた。怒りでルシアしか見えていなかつた黒いドラゴンは、たちまち炎に包まれた。男はその前に、黒いドラゴンから飛び降りた。

「呪われし子供よ、また何処で会おう！」

男はそう言つと、闇に包まれ、消えてしまった。

ティーナはルシアの話が本当だつたといつ事を確信していたが、彼に声をかけた。

「ルシア…？」

ティーナは、心配そうにルシアの顔を覗き込んだ。ルシアの瞳はまだ、紅いままだつた。

「血…殺す…殺す…」

と、ルシアは唱えるように呟いていた。ドラゴンは、そつと左方の翼でルシアを覆うように包み込んだ。

「ルシア、もう、終わつたのだ。血で自分を汚すのではない」

ドラゴンは静かに、優しく言つた。ドラゴンが翼をじけると、そこから現れたルシアの瞳は、もとの色に戻つていた。

「『めん、ティーナ。俺の事怖かつただろ?』
ルシアの瞳は悲しそうだった。

「ううん」

と、ティーナは笑顔で首を横に振った。正直、ティーナは恐ろしい
と思ったが、もとに戻り、人を恐れているルシアを見て、そんなも
のは消し去つてしまつていた。

「この町が助かつたわ。ありがと」

「俺の事、怖くないの?」

ルシアは少し驚いたように、再び尋ねた。

「私は、ルシアの事好きよ。だから、どんなルシアを見たつて怖く
ないわ」

「人にいつも嫌われてたから、何かちょっとビッククリしちゃつた」
トルシアは言った後、

「ティーナ、ありがとう」

と、いつもの笑顔を向けた。

「あの悪いドラゴンは倒せたけど、ナイトさんは可哀相だつたわね
と、ティーナは残念そうに言った。

「大丈夫、ナイトさんは食べられて時間が経つてないから、出てこ
られるよ」

燃える黒いドラゴンの体は徐々に霧のように消えていき、少し経つ
と、ナイトの体が現れた。

翌日、ナイトはティーナの家で看護されたが、当然ティーナを貰
う事はできなかつた。

「もう、行くの?」

ティーナは、旅に向かうルシアに言った。

「うん、困つた人はいっぱいいるから
と、ルシアはにっこりと笑つた。

「この町にまた来たら、家へ来てね。その時は、もつと料理を用意
しておくから。いつでも待つてるよ」

「ありがとう」

そして、ルシアとエランは次の場所へと向かつた。

第11話 始まりの場所

「ドラゴン、契約だ」

一人の男は、契約を交わした。

「よからう」

白いドラゴンは、契約を承諾した。

契約。

人間とドラゴンは、共存の道を選んだ。だが、長くは続かなかつた。

「ここは…嫌な処だ」

ドラゴンはそう言つて、街の近くの岩場に降りた。ルシアはいつもと同じように、ドラゴンの背から降りた。

「いつもより、不機嫌だね」

と、ルシアはドラゴンの顔を見た。

「ここは、全てが始まった場所なのだ…」

「ドラゴン？」

この時、ルシアはドラゴンの言つている意味がわからなかつた。

「さあ、さつさと行つてこい」

と、ドラゴンはルシアを促した。

「うん、じゃあ、行つてくるね！」

街は賑やかで、不思議な恰好をしている者が多かった。

尖んがり帽子や先が上に向かつてカーブを描いている靴、黒一色の人がいるかと思えば色とりどりの派手な服を身に纏つた人もいる。また、ホウキやステッキを持つている人もいた。そんな人々が行き交う通りの店では、水晶やドクロ、大きな釜、妖しい薬など他の場所では売つていよいよ珍しい物が並んでいた。

「ねえ、困つた事はないかい？」

ルシアは、黒い布を頭から被つた男とも女とも見分けがつかない者に尋ねた。その者は、通りでテーブルに水晶玉を置き、ただ椅子に腰掛けていた。

「あんたが来る事はわかっていたよ」

声からして、年の取つた女のようだった。

「困つた事は、あんたに道を示すか否かといつ事。どうしたものかねえ」

「道を示す？何でそんな事を迷うの？」

「お前さんにとつて悲しく辛く、お前さんの相棒にとつても同じだからさ。だけど、いつかはお前さんは知る。今よりも、いつかの方が苦しいかもしない。だが、私が道を示していいものか」

「あなたは…未来がわかるの？」

ルシアは真剣な表情で老婆を見つめた。

「見えるわ。だけど見えると言つても、お前さんが私に話しかけて来る事やほんのわずか先の未来だけさ」

「この水晶で見えるの？」

と、ルシアはテーブルの上に乗つた水晶玉覗いた。

「これはお飾りみたいなもんさ。たいしたものを見えないよ」と、老婆は笑つた。

「…俺には見えるよ。この中に俺が殺した人達の顔が見える」「ルシアがそう言つてじつと水晶を覗き見ているので、老婆も覗き込んだ。

すると、水晶玉は血のようにな真つ赤な煙で曇り、その中には白い顔の人間達の顔が次から次へと浮かび上がっていく。

どの顔も苦痛に満ちていた。それはまるで、地獄を覗いたかのような光景だった。

「お前…」

と老婆は驚いて顔を上げ、ルシアを見た。

「いつも俺の中には、この人達の悲鳴が聞こえてくる。その悲鳴は、頭の中に広がつて、耳を塞いでもずっと聞こえるんだ。悲しくて、辛くて、これ以上苦しい事なんてないよ」

ルシアは表情を変えず、水晶玉を見続けていた。

「だから、教えて。俺がいつかは知る事。いつか知るつて事は、大切な事で、必ず聞かなきやいけない事でしょ？ だつたら聞くよ。あなたの悩みがこれで消えるでしょ？」

ルシアは水晶玉から眼を離し、老婆に微笑んだ。
「お前さんがそう言つのであれば道を示そう。あの大きな白い建物が見えるじゃらつ？」

と、老婆は通りの先に見える建物を指差した。

「あの建物へお行き。そうすればわかるよ」

「うわあ

初めて来る場所に声を漏らした。ルシアは老婆に言われた建物に来て
いた。

周りには、天井に届くかと思うぐらいの高い本棚がいくつも置いて
あつた。本の数なんて数え切れない量だ。

一冊、近くの本を手に取つた。何ページかめぐると、ある挿絵で手
が止まつた。

「これ、ドラゴンに似ている……」

その挿絵は、一匹の紅いドラゴンが描かれていた。

「君、そこで何しているの？」

ルシアは声をかけられ、後ろを振り向いた。

そこには、一人の青年が立っていた。歳は18、19くらいだ。
「本を見ているんだ。でも…字が読めない」

と、ルシアは淋しく笑つた。

「貸して、僕が読んであげるよ」

と青年はルシアに近付き、手を差し出した。ルシアは黙つて本を渡した。

り掛かつた。

ルシアも青年の隣に座つた。

『昔々、ドラゴンと人間は争っていました。ドラゴンは人間を食べると、強力な力を得る事ができました。人間はドラゴンの血を飲むと、永遠の命を得る事ができました。

立上かりました 平和を願ひ入
々は、その青年に願いを託しました。

青年は、危険を承知ながらもドラゴンの住化に向かいました。

に真っ白でした。

アリスの心の冒頭は、この歌の歌詞である。

青年はドラゴンを見上げて、大きな声で言いました。

アーティストの間で一回りした無意味な争いはもつて、終わらじしないか

5

”この長きに渡る戦い”と鼻で笑つて言いました。

”今だからだ。私達は愚かな生き物だ。長い月日を経て、やつとこ

の争いの無意味な事を悟つたのだ。あなた方のような賢い種族なら
おわかりであるづつ、私達を許してくれとまでは言わない。ただ、お
互いを傷ける事を止めたいのだ”

青年の言葉を聞いて、ドラゴンは大笑いしました。

”口の上手い奴だ。私共に怯む事なくここまで来た事、お前の口の
上手さに、その話を受けてやろう！”

こうして、人間とドラゴンとの争いは終わりました。
しかし、それには条件があったのです。その条件とは、互いに契約
を結ぶ事。

契約

もしも、人間がドラゴンを殺した場合、その身が果てようとも、永久にこの地に囚われる。もしも、ドラゴンが人間を殺した場合、その身は人間の血の色に染まり、その色が消えぬまで、永遠に苦しみ続ける

でも、平和を良く思わない人間がいました。

男は強欲な人間で、ドラゴンの血を売りさばき、お金に代えていました。

そんな彼は、契約の事を知らない他の町の人々を唆し、ドラゴンを殺しに行きました。

平和がしばらく続き、それに慣れていたドラゴン達は、大勢の人間達の襲来に驚きました。不意を突かれドラゴン達は、次から次へと殺されていきました。

男はその光景を愉快そうに見ていました。

人間達の襲来に怒り狂つたドラゴンの長は、人間を喰い殺しました。そんな事実を知った契約を交わした青年は、悲しみに陥りました。そんな青年のもとへ、ドラゴンの長と同じように人間を喰らつたドラゴンがやってきました。

そして、青年が契約を交わした後に結婚した妻と子供達を二人喰らいました。青年はそのドラゴンを殺しました。

その時の青年の心は、怒りも悲しみも過ぎ去り、何も感じる事ができませんでした。そこへ助けを求めてやって来たのが、強欲な男でした。

青年はその強欲な男の心臓に剣を突き刺しました。

強欲な男は死ぬ間際に言いました。

”お前がこんな契約を結んだのが悪いのだ！平和など手に入れりやしないんだ。お前の子供と平和を願つた奴らの子供に呪いをかけてやる！！人間の血を求め、苦しむ呪いを。あのドラゴンと同じさ。ハツハツハツ……”

青年は、慌てて家中を見ました。

すると、四番目のまだ赤ん坊だった子供が布に包まれ、洋服棚の中に隠されていました。

青年は子供の呪いから先を案じて殺そうとしましたが、殺す事はできませんでした。青年は、その子供を抱き抱え、その地を去りました。

第15話 真実を知つた今

その後、青年と子供がどうなったのかは誰も知りません。ただ、あの「ドラン」の長の苦しむ悲しそうでもある鳴き声は、何処からか聞こえてくるのです…』

青年は読み終わり、本を閉じた。そして、隣にいるルシアにそつと手渡した。

「この話…」

ルシアはじつと本を見つめた。青年は立ち上がり、建物の入口へと向かった。

ルシアは

「はつ」として顔を上げ、

「待つて！君の名前は？」

と、青年を引き止めた。何故かはわからないが、行つてほしくなかつた。

青年は振り向き、

「アル」

と言つて、微笑んだ。その瞬間、強い風が吹き、一瞬にして青年の姿は消えた。

「どうしたルシア？」

うすくまつて眠つていたドランは顔を上げ、やつて来たルシアを見た。

「ドラン、俺、ある物語りを読んだんだ」

ドランは、ルシアがいつもと違う様子に気がついた。

「ドランと人間は争つてたけど、契約をした事で争いが終わつたんだ。でも、人間の悪い奴が契約を破つちゃうんだよ。それで、怒

つたドラゴンは人間を喰い殺して苦しむ。契約を結んだ人も、家族を殺したドラゴンと悪い奴を殺すんだ。だけど、悪い奴は呪いをかけるんだよ」

と、ルシアは物語りの内容を話した。

「ねえ、ドラン。その呪い、どういう呪いかわかる？」

と、ルシアは笑つた。その笑顔は、悲しいものだつた。

黙つて聞いていたドランだが、ゆっくりと重たい口を開いた。

「…知つていてる。その呪いは、お前にかけられている呪いだ」

「ドランは昔、ドラゴンの長だったんでしょ？」

とルシアが尋ねると、

「そうだ」

と、いつもの落ち着いた声で答えた。

「お前にきちんと話すべきだつたな」

「街の…子供達はどうしたの？」

「血を求め、殺戮を繰り返した。だから子供らの親は、自らの手で、自分の子供を殺した。そう…お前が今日来たこの街は、一度は滅びかけたのだ」

と、ドランは街の方を見つめながら言った。

「俺は…何で生きてるの？」

と、ルシアは俯いて言つた。

第16話 ドランの悲愴

「お前の親は、手を下せなかつたのだ。だから、お前は今、生きている」

「こんなに苦しいのなら、殺してほしかつた…」

ルシアは、震えた声で言つた。

「お前の父親も苦しいだろう。肉体が滅びようとも、この地に永久に囚われているのだから…」

ドランの言葉にルシアは驚いて、顔を上げた。

「お前の父親は、私と契約を交わした男だ」

ルシアはこの時初めて、顔も名も知らない父の事を知つた。

「お前の父親、”アル”は殺されたのだ。契約を結んでの結末に家

族を喰い殺された人間の手…」

「…アル。ドラン！俺、アルつていう人に本を読んでもらつたんだ…でも、偶然、名前が同じだつただけかな？」

（偶然。そんな偶然、あるわけなかろう。あいつはこの地に囚われているのだ。苦痛と共に…）

ドランはルシアが会つた青年がルシアの父、アルだと核心していたが、口には出さなかつた。

「ルシア、どんなに苦しくても、私も同じに苦しい。お前一人だけじゃないよ。殺してほしかつたなんて言わないでくれ。私は、あの日から、お前と共に生きようと決めたのだから」

と、ドランは優しく言つた。

「じめん、ドラン」

と、ルシアはドランの瞳を見つめて言つた。その瞳は、悲しそうだつた。

「街に戻るね」

ルシアが再び街へと向かつて行く姿をドランは見送つた。

（憐れなルシアよ、お前はどれだけ苦しみを背負えばいいのか。お

前の父を殺したのは、お前に名をつけ、お前を育てた男なのだ。そう、お前が殺したあの男。私は、運命など信じぬ。これ以上、お前が苦しむ運命など！私はお前の苦しみの分まで背負おう。それが、私の罪の償いなのだ……）

悲しき記憶は、今でもドーランの中では過去ではない。

「ねえ、困った事ないかい？」

トルシアは街の人々に尋ねるが、人々は変な顔をして通り過ぎるばかりであった。

第17話 新たな出会い

「ねえ、困った事ないかい？」

やつと尋ねたルシアに答えてくれる者がやつて来たが、「バカだね、あんた。この街は今や、世界でも名の知れた魔法使達が住む街だよ。困っている事なんてあるはずがないだろ。あつたとしても、自分達で解決できるさ」

と女は鼻でせせら笑うと、去つて行つた。

「何か、この街に来た意味がないかも。でも…ドランや父さんの事が少しわかつたわけだし、来て良かつたのかなあ」

ルシアが独り言を言つて歩いていると、後ろから声をかけられた。

「あの、あなた、街の人達に困っている事はないか尋ねているそうね」

と、40代くらいの女は言つた。

「そうだよ」

と、ルシアは頷いた。

「何でそんな事を？仕事を探しているの？」

「違うよ。ただ、困っている人の役に立ちたいだけ。それだけだよ」

とルシアは、にっこりと笑つて答えた。

「それなら、私達の頼みを聞いてちょうだい。私の息子の友達になつてほしいの」

「いいよ」

ルシアはすぐに返事をし、女はその返事に嬉しそうだつた。

ルシアは女の家に案内された。そして、地下室へと連れられた。

「この子なの」

薄暗い部屋の中に大きな檻が置いてあつた。その中に、何かがうごめいていた。

ルシアは恐る恐るゆづくつとその檻に近付いて行つた。

「二ノゲン？」

檻から声がしたかと思つと、紅い眼が二ノルシアを捕え、飛び掛かるように檻の柵を掴んだ。ルシアは驚いて、後ずさつた。

檻の柵の間から鼻がつきでて、くんくんとにおいを嗅いだ。

「オマエ、オナジニオイガスル」

檻の中をようく見ると、その中に入っていたのは、ルシアと同じ歳くらいの少年だった。

「この子、他の子とは違つて少し気性が荒いけど、本当はとてもいい子なのよ。檻の外から話すだけでいいから、友達になつてやつてちょうだい」

と、女はルシアに断られるんじゃないかと、ピクピクしながら言つた。

「うん

と、ルシアは笑顔で頷いた。それを見て女がホッとした表情を見せた時、女と同じ歳くらいの男がやって來た。

「あなた、この子に友達ができたのよー」

と女は、男に嬉しそうに話した。

「そうか、良かつたな」

と、女の夫らしい男はにっこりと笑った。

「君かい？ 友達っていうのは」

と男は、ルシアを見た。

「よろしく」

男は笑顔でそう言つと、上の階へと上がつて行つた。

「そういえば、あなたの名前、聞いていなかつたわね」

「俺の名前は一応、ルシア」

「そう、ルシアね。ルシア、一つだけ守つてほしい事があるの。この地下室に私達の息子がいる事を内緒にしてほしいの。守れるから？」

女の言葉を不思議に思つたルシアは、

「何で内緒にしなきゃいけないの？」

と、尋ねた。その質問に女は答えにくそうだった。

「私達…怪物を飼つてゐるつて噂されてるの。この子、人を殺した事があるの。何人も。その時家に逃げ帰つて来るこの子を見た人がいて、この噂が広まつたのよ。でも、この子は怪物じやない！！私達の息子よー！」

女はそう言つて叫ぶとうずくまり、泣き出してしまつた。

ルシアはそつと女に近寄り、肩に手をかけた。

「この子の名前を教えて」

とルシアに言われ、女は顔を上げ、

「ガイロよ
と、答えた。

「俺は、ルシア。よろしく、ガイロ」

「ル…シ…ア…？」

「今日から友達だよ

「トモ…ダ…チ…？」

「ありがとう…ルシア」

と、女は涙を流したまま、ルシアに向かつて微笑んだ。
地下室からルシアが上がって行くと、男が椅子に座つて紅茶を飲んでいた。

ルシアが何も言わずに出て行こうとすると、男はルシアの背に向かつて言った。

「あの子は、化け物だ。信じたくもないし、認めたくもないが、確かに現実なんだ」

ルシアは振り向き、男を見た。

「昔、この街の子供達は呪いをかけられた。人間の血を欲し、求めるという呪いをね。その時皆、我が子を殺した。でも、私達にはできなかつた。やつと…やつと生まれた子だつたんだ。でもあの子は…」

と男が言いかけると、ルシアは、
「化け物なんかじゃない！」

と、叫んだ。

男は驚き、声を失つた。

「人を殺したくないのに、体の血が自分と同じ人の血を追い求める。とつても、苦しいんだ。苦しくて、それから逃れたくても逃れられない…」

「君は…」

と男がいいかけた時、女が地下室から上がつて來た。

「どうしたの？ 大きな声が聞こえたけど…」

「俺、もう行くね！ 明日、またガイロに会いに来るよ…！」

そう言つてルシアは外に出た。

次の日、ルシアは約束通り、ガイロのもとへと向かつた。

「ガイロ、君はお父さん、お母さんが好きかい？」

とルシアは何気なく尋ねたが、暗い檻の中からは返事が返つてこなかつた。

「ガイロは、この檻の中にいるの嫌じやない？」

「…」

ガイロからの返答はまた沈黙かと思つていると、奥の方から一言、呴きのような声が聞こえた。

「…イヤ…ダ…」

ルシアは、その声をしつかりと聞きとめた。

「ガイロ、こいつそりここから抜け出しちゃおつか！！」

トルシアは言うと、檻から少し離れた所に、壁にかけてあつた鍵を手に取つた。そして、ガイロを檻から出した。ルシアは初めて、ガイロの姿をはつきりと見た。自分と同じくらいの背で、瞳が紅く染まつてゐる事以外、他の人間の少年と何ら変わりなかつた。

「そのままじや、バレて怒られちゃうから」

トルシアは言い、側にあつたボロ布をガイロに頭から被せ、身に纏わせた。

「これでよし！じゃあ、外に行こいつ！－！」

ルシアはガイロの手を取り、ガイロの母が奥の部屋を掃除しているのを見計らつて、外に出た。

ガイロは、空に高く昇つた太陽を見上げて目を細めた。

「ガイロ、いろんな処歩こいつ」

ルシアはガイロの手を引いたまま、街の人込みの中へと入つて行つた。

ガイロは急に鼻をひくひくとさせ、走つて行つた。

「ガイロ？」

ルシアは走つて行くガイロを追い掛けた。

ガイロは香ばしい肉の薫が漂う出店の前で、止まつた。こねた肉が棒についている物を網が掛かつた炭火の上で店の男が焼いていた。それをガイロはじつと見つめていた。

ルシアはポケットから小銭を出し、確認した。わずかであるが、一つだけ買えるぐらいの金はあつた。

「おじさん、一つおくれ」

と、ルシアは金を店の男に差し出した。

「はいよ。毎度」

と店の男は金を受け取り、肉の棒を渡した。ルシアは受け取ると、ガイロに差し出した。

ガイロは一口噛つた。肉汁がぽたぽたと滴り落ちた。

ガイロがガツガツと食べ始めると、ルシアはその様子をじつと見ていた。すると、腹の虫が鳴り出した。

「グゥー、ギュルルル……」

ガイロは食べるのをやめ、ルシアの腹を見た。

「えへへへ……」

とルシアは少し照れながら、頭をかいた。

ガイロは食べかけの肉の棒をじつと見ると、黙つてルシアに差し出した。

「いいよ。ガイロ」

とルシアは首を横に振つたが、ガイロは肉の棒を突き付けた。

「ありがとう」

ルシアは言って、肉の棒を受け取り、残りを食べた。

それから一人は再び歩き出し、街の中を眺めつつ街の外へと出た。ルシアがやつて来た方向とは逆の街の出入口には、すぐ近くに小さな丘があった。

「行こう」

ルシア達は、丘を駆け登った。

丘から下を見下ろすと、すぐそこには花が咲き乱れる野原が広がり、小川が流れていた。

「わあ、綺麗な処だなあ」

ルシアは野原に駆け込んだ。

ガイロはその様子を立つて見ていたが、ルシアが振り向き、ガイロを呼んだ。

「ガイロ！ 来なよ！！」

ガイロは小走りに、ルシアのもとへと駆け寄った。

「川に魚がいるかな？ 見てみよう」

第21話 ドランとアル

川を覗きに行くと、小さな川魚が陽の光できらきらと体を光らせながら泳いでいた。

ガイロはそつと川の中に手を入れ、驚いたようにすぐに手を引っ込めた。

「冷タイ」

「そうだよ。水は冷たいんだよ」

と、ルシアはガイロを見て笑った。

「ガイロ、この花のにおいを嗅いで『じらん』

ガイロはルシアの横に来て、鼻をひくひくさせながら、においを嗅いだ。

「不思議ナ…ニオイ。甘クテ、懷カシイニオイ」

「もうすぐ日が陰るね」

と、ルシアは空を見上げた。

いつの間にか、太陽は少しづつ沈み始めていた。

「もうそろそろ帰ろう」

とルシアは、ガイロを見た。ガイロは黙つて頷いた。

家にこつそりと入り、ガイロを檻の中に入れ、鍵をかけた。

「ガイロ、また一緒に遊ぼう」

とルシアは笑つて言つと、地下室を後にした。

「ルシア…」

ガイロは、誰もいない薄暗い部屋の中で呴いた。

夜になり、ルシアは馬小屋に忍び込んでそこで一夜を過ごした。

「ドラン…」

眠っていたドランは名を呼ばれ、顔を上げた。

月の光で岩は鋭く、じつじつとした肌をあらわにしていた。

岩の影が長く伸びた先に何かが動いていた。ドランは目を細め、じつと見つめた。そこから、男がドランのもとへと近づいて来た。

「アル」

「ドラン、久しぶりだね」と、アルはにっこりと笑った。

「契約を結んだ時の姿なのだな」

ドランは、死んだ時の年齢よりも若いアルを見て言った。

「姿は、見る者によつてさ。もつ、僕に肉体はないよ」

「すまない。私のせいでお前は…」

「ドラン、君のせいじゃない。何かを得れば、それだけ失う代償もつくのや」

「だが、その代償はあまりに大きい。お前を私は苦しめてしまった」とドランが言つと、

「ドラン、自分を責めないでくれ」と、アルは優しく言つた。

「君が僕のために苦しんでいると、僕にとつてそれが一番苦しいんだ

「アル…」

第22話 交錯し始めた糸

「ドラン、僕は君に感謝しているんだ」

「感謝？私は何も…」

「息子を…ルシアの命を助けてくれてありがとう。そして、育ててくれて」

と、アルは微笑した。

「あれは罪の意識からだ。私のエゴさ。感謝される程のものではない」

「ドラン、エゴだけで自分の命を捧げる事なんてできないさ。それに、ルシアだつて君を慕うはずがないだろ？？」

とアルは、諭すように言った。

「僕達の苦しみは、意味がないものではないと思うんだ。この苦しみは、二度と同じ事を、同じ時代を繰り返してはいけないという意味なんだと思う。だから、その苦しみを知っている君とルシアは伝えるためにいるんだ。そして、僕も…」

「この世界の救世主になれとでも？人間を救えといつのか。この私に。人間のために」と、ドランは鼻で笑つた。

「人間のためじゃない。全ての生き物のためにさ」

「それが…私にさせられた使命、罰なのか…」

朝になり、ルシアはガイロの家へと人込みの中を抜けていた。

その人込みの中に、見覚えのある顔があつた。それは、前の村で黒いドラゴンを連れていた男だった。

ルシアはその男を追い掛けたが、すぐに見失つてしまつた。この時、ルシアに不穏な風が吹いた。

「この街は相変わらず変わっていない。自分達の力に自惚れ、暢

「気にのうのうと暮らしている。まつたく、来るのも嫌になる場所だと、黒いドラゴンを連れていた男は不機嫌そうな顔をして、独り言を言つていた。

「だが…それも今のうちだ。もつすぐこの街は、血と悲鳴でいっぱいになる。こんな故郷など、さつさと潰してやる」

男は不気味に笑いながら、人込みの中へと消えて行った。

「ルシア、少しお茶を飲んでいいかい？」

ガイロの母は、帰ろうとするルシアを引き止めた。

「うん」

ルシアは素直に椅子に座った。

第23話 閻夜に紛れて

「ありがとうね、ルシア」

と、母は甘酸っぱいレモンの香りがする紅茶をルシアに出した。

「あの子、あなたと会つようになつてから、少しずつだけど、喋るようになつたの。それに、何だか落ち着いてきたみたいで、昔のようになつたのよ」

「俺も、ガイロと友達になれて良かったよ」

と、ルシアは笑つた。

「キヤーッ！…」

静かな夜の街は、一つの悲鳴で搔き乱された。ルシアは馬小屋から飛び起き、外に出た。

「ハハハハ…さあ、もつと喰らえ！…」

月明かりに照らされて、黒いドラゴンに乗つてゐる男が見えた。

「お前は…やめろッ！…」

ルシアが叫ぶと、男はルシアに気付いた。

「おお！お前は呪われし子供…再び会つたな

と、男は嬉しそうに笑つた。

「何でこんな事を！」

「何で？その問いに答えよう…ドラゴンは人間を喰らう事で、強力な力を得る。そして、そのドラゴンを私は食し、さらに強力な力を得るのだ…！その力で私は、この世界を統治するのだよ」

と、男は愉快そうに話した。

「そんなのいけない事だよ！ダメだ…そんな事しちゃつ…」

「お前が私を邪魔をする気なのであれば、容赦はせんぞ…！」

黒いドラゴンは、青い炎を吹いた。ルシアはとっさに避けた。

避けた場所の地面は、たちまち凍りついてしまつた。

「ドラン…」

ルシアが笛を握った瞬間、

「そ、うはせん！」

と男は言い、ドラゴンは翼で大きな風を巻き起こし、ルシアを吹き飛ばした。

「うわあっ」

吹き飛ばされたルシアは、地面におもいつきりたたきつけられた。

その隙を見て、ドラゴンは前足でルシアの体を地面に押し付けた。

「うつ」

めりめりとルシアの体が押し潰され、地面へと沈み込んでいく。

（助けて……誰か……）

「何だお前は！」

男の目の前に布を頭から被り、顔を隠した者が現れた。

その者は大きなナイフ型の剣で、ルシアを押し潰しているドラゴンの足を切り付けた。

第24話 トモダチだから

「ギャアーッ」

ドラゴンは悲鳴を上げ、足をルシアから離した。

ルシアは痛む体をかばいながら起き上がり、自分の横に立っている者を見上げた。

布の中から、紅い瞳が覗いていた。

「ガイロ…？」

「ルシア…大丈夫力？」

「どうしてここへ？抜け出して来たの？何で？」

「血ノニオイガシタ。ダカラココ来タ。ルシア、友達。友達、傷ツケタクナイ」

と、たどたどしい口調でガイロはルシアの質問に答えた。

「邪魔者がまた増えたか」

と男は言い、

「やれ」

と、ドラゴンに命令した。ドラゴンは口から青い炎を吹き出す。

「ガイロッ！逃げて！！」

体が上手く動かせないルシアは咄嗟に叫んだ。だがガイロはルシアに向かつて微笑むと、青い炎に体を向け、手を広げた。

「ガイロ…！」

青い炎はガイロを包み込んだ。ガイロの体はたちまち氷漬けにされてしまった。

「馬鹿な奴だ」

と、男は笑った。

「せめてもの慰めだ。私がどごめをさしてやろう」

男はそう言つと、人差し指を頭上に掲げ、空中で円を描いた。

空が曇り、黒い雲から雷の唸る音が聞こえてきた。男は掲げていた手を目の前に振り下ろした。すると、一筋の稻妻が氷漬けにされて

いるガイロの頭上に落ちた。

ガイロの体はルシアの目の前で、粉々に砕けた。

「ガイローつ！！」

ルシアは涙を流しながら、叫んだ。

「次はお前だ」

「よくもつ！」

ルシアの瞳は紅く染まり、男を睨みつけた。

ドラゴンは青い炎をルシアに向かつて吹き付けた。ルシアはその炎を避け、腰につけていた短刀で男の首元を切り付けようとした。だが男は避け、ルシアの顔面を手で押さえ付けた。男はニヤリと笑うと、ルシアの顔面を押さえている手から炎を出した。

「ア、アアアアアツ！！！」

ルシアの体は炎で包まれた。

男は手を離し、ルシアを地面へと落とした。ルシアの体は焼け焦げ、真つ逆さまに落ちていく。

第25話 閻の契約

地面へともうすぐ着くといつといふで、ドランがやつて来てルシアを受け止めた。

「ド…ラン…？」

ルシアは目を開け、ドランを見た。ドランの体はルシアと同じようになに焼け焦げていた。

「ルシア…大丈夫か？」

と、ドランは喘ぎながら言った。

「ドラン、ごめんね。俺のせい…」

「なるほど、お前らは闇の契約を行つたのか。フン、弱い人間と契約を結ぶとは命知らずだな」

と、男は嘲笑した。

ドランは歯を食いしばり、男を鋭い瞳で睨みつけた。

「私を侮辱してもいいが、この子を侮辱するのは許さん…！」

「アハハハ」

ドランの言葉を聞いた男は、突然大笑いした。

「ドラゴンのくせに人間をかばうのか！面白い奴だ」

「人間をかばつているつもりはない！私は、ルシアだけだ…！」

「こんな奴をかばつてどうする？こいつにどんな価値があるのだ？」

「ルシアは私が初めて信頼した人間の子供なのだ。そして、私はその信頼した人間を苦しめてしまった。だから、これは私の罪の償いであり、私はこの子を護り、運命を共に生きようと誓つたのだ」

「お前がどんな理由でそいつを護るうとも、その傷ついた体でどうする気だ？このまま死ねばただの死に。滑稽だ。契約を結んだのは間違いじゃなかつたのかね？」

「契約を結ばなければこの子は死んでいた！私には、この子を死なせる訳には行かなかつたのだ」

「ドラン…」

ルシアは、力のない声でドランを呼んだ。

「ドラン、こいつの通り通りだよ。契約を…断つ。そうじゃないと、ドランが死んじやうよ」

と、ルシアは涙を流しながら言った。

「ルシア…」

ドランはルシアを見つめた。傷だらけになりながらも、自分の事を思ってくれる人間を。

第26話 もう一つの真実

「ルシア、お前が育ての親を殺し、血を求めさ迷い、人間に殺されかけた時のお前を見た私は、助けたいと思つた。虫の息だったお前を助けなければと。だから私は、お前と命を一つにした。私は後悔してはいない。むしろ、今この時、お前を助けてやれない事に悔しさを感じている」

と、ドランは悲しそうな顔をして言つた。

「ありがとうございます、ドラン。俺、ドランと一緒に生きてこれて良かった」と、ルシアは微笑した。

「さあ、お別れは済んだかな？では、とじめを」と男が言つた時、

「お待ちつ……」

と、老婆のしわがれた声が聞こえた。

「おや、これは先生ではありますか」と男は老婆を見て、お辞儀をした。

「お前にこんな事をさせるために、私は魔法を教えたのではない！」

「あのお婆さん……」

ルシアは、水晶玉を持っていた老婆を思い出した。

「お前は自分の有り余る力をコントロールしきれんのじゃ……」

「何をおっしゃるのです。自分の力はちゃんと把握していますよ。この街の者達が愚かなだけです。そしてあなたも」

と、男の目つきが変わり、笑みが消えた。

「この街の者達は平和を願い、呪いをかけられた。その時、修業のためにこの街を出ていた私は、呪いの事など知らなかつた。私にとっては、幻想のような話だつた。だが、新しく生まれ変わつた街は、私を受け入れなかつた。街の中身はまだ昔のままだつたんですね」

「呪われし子供よ、何故私が受け入れられなかつたのかわかるかい

？」

と、問い合わせた。

「私がこの街に呪いをかけた男の子供だつたからだ。この街の連中は、私を殺そうとした！そして、あなたも！！」

男の瞳は、怒りと悲しみに染まっていた。

第27話 師を越える力

「お前は、どんな者よりも力が優れておつた。だから、危険だとあの頃の私は思つてしまつた。あの頃皆、大事な子供らを失い、異常になつていたのじや。そう、私もそうだつた。すまぬ、サドナ」と、老婆は俯いた。

「今さらそんな事言つたつて無駄です！！」

とサドナが言うと、老婆の足もとに呪いの絵が黒く光つて現れ、強く光を放つと、老婆を包み込んだ。

「サドナっ！」

老婆は持つていた杖を地面に一打ちすると、黄色の光が放たれた。それは老婆の足もとに広がり、サドナの魔法に対抗した。

「今は、あなたより私の方が上ですよ」とサドナは言い、目の前に手を翳した。

老婆の足もとにあつたサドナの呪いの絵が、老婆を囲むように現れ、黒い光は一つとなり、大きな光へと変わつた。

「うわあああっ！！」

老婆は苦しみの声を漏らし、体はボロボロに傷つき、倒れた。

「これでわかりましたか？力の差を」

と、サドナは勝ち誇つたように笑つた。

「大分待たせたな」

サドナはルシアとドランの方へと、向き直つた。

「ドラン…」

「クツ」

ドランは最後の力を振り絞り、翼を広げ、空中へと飛び立ちサドナと黒いドラン曰掛けて炎を吹いた。

「頑張りは褒めてやるわ」

とサドナは言って、片手を横に直線に振つた。ドランの炎は、サドナから放たれた水で消された。

黒いドラゴンはその瞬間、ドランに向かつて青い炎を吹いた。

ドランは攻撃を受け、半分氷漬けになり、地面にたたきつけられた。

「うつ……」

ドランと同じ痛みがルシアを襲つた。

「ルシア、すまない」

と、ドランは今にも消えそうな声で言った。

「ごめん、ごめん……俺には何の力もない。あるのは、人を殺す力だけ。ごめん、ドランは俺を助けてくれたのに。俺は何もできない」と、ルシアはドランの体に顔を埋めた。

「さあ、死ねつ……」

黒いドラゴンから、とどめの青い炎が放たれた。

第28話 聖なる祈り

（俺は、ドラゴンを助けたい。力が欲しい）

ルシアは祈るように、田をギュッとつぶつた。その時、ルシアの耳に声が聞こえてきた。

『ルシア、お前ならできるよ。お前には、ドラゴンを救える力がある』（父さん…？）

ルシアは顔を上げ、青い炎をじっと見つめた。

「俺の力…」

（ドラゴンを…ドラゴンを助けたい…！）

青い炎は、ルシア達の田の前で弾け飛ぶ。

「な、何だこれは！…？」

ルシアが強く思つた時、大きな呪いの絵が現れた。

それは、サドナと黒いドラゴンの真下にまで広がつていた。

「これは…」

と、気絶していた老婆は顔を上げた。

「アルしか使えない最大の魔法、ホリープレイヤー（聖なる祈り）」まだ夜の明けない空から光が差し、光を身に纏つた輝くドラゴンが落ちてきた。

そのドラゴンが呪いの絵の中へと落ちると、呪いの絵は強く光り、辺りを真つ白な光で包み込んだ。

光が消えた後、ルシアはゆっくりと田を開けた。田の前にいたサドナは、黒いドラゴンと共に倒れていた。

「ルシア、一体何が起きたのだ？お前は何をした？」

ヒドラゴンは傷が癒えているのに気付き、驚いていた。

「父さんが、ドラゴンを助ける魔法を教えてくれたんだ」と、ルシアは笑つた。

「お前さんは、アルにそつくりだねえ」

と、老婆も傷が癒えたらしく、ルシア達のもとへとやつて來た。
「あいつは、どうしちゃったんだうー死んじゃったのかなあ」と、ルシアはサドナを心配そうに見た。

「あんな奴の心配など」

と、ドランは鼻で笑つた。

「大丈夫、この魔法は人を癒し、悪しきものを消しとばすものさ。あの子は、今は氣を失つてゐるだけ。真、目覚めるだらうよ」と老婆は言い、

「ありがとう、あの子を止めてくれて」と、微笑んだ。

ルシアの希望で、サドナが目覚めるまでこの街にとどまる事となつた。

ルシアも、争いの原因となつた父の子供もまた、争いの犠牲者。争いは憎しみを呼び、また憎しみは争いを呼ぶ。この循環の終焉は……？

「サドナ、もう一人で苦しまないで。俺は君のために何かしてあげたい。君はもう、一人じゃないよ」

ルシアは、ベットで寝かされているサドナに話しかけた。まだ意識の戻らないサドナからは、返事が返つてくる事はなかつた。翌日、サドナの姿はベットから忽然と消えていた。サドナの行方を知る者は誰もいない。

そして、ルシアもこの街から旅立つた。悲しい過去を持つこの街から。

ルシアとドランの旅は続く。行く宛てもなく、果てしなく続く道を辿つて。

彼らの心が癒え、罪が消えるまで永遠に。

少年は、罪を犯した。

呪われた手。

もがいても、もがいても

呪いから逃れることはできない。

少年は、今日も紅い涙を流す。

零れ落ちる紅い、紅い滴一。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307a/>

RED DRAGON

2010年10月28日04時11分発行